

イシイルカ 太平洋・日本海・オホーツク海

Dall's Porpoise, *Phocoenoides dalli*

管理・関係機関

水産庁・漁業道県

最近一年間の動き

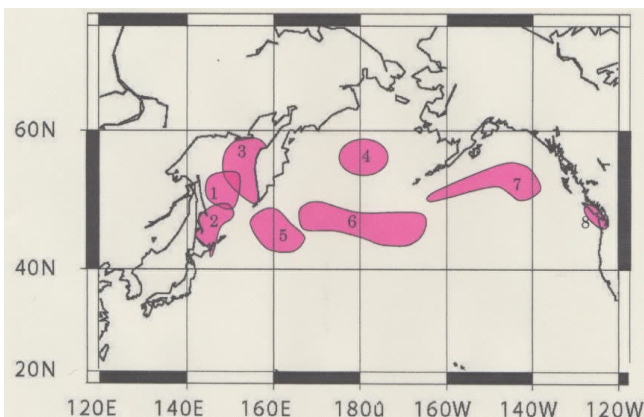
2005年のイシイルカ型の捕獲は2003年以前のレベルに戻り、2004年の減少は一時的な現象と考えられる。現在、調査データに基づいた資源量改訂作業と捕獲枠改訂を進めている。

生物学的特性

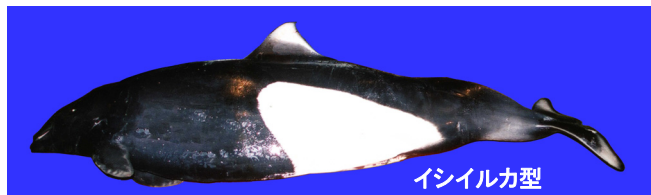
- イシイルカ型とリクゼンイルカ型の2型
- 寿命: 15~20歳(詳細は未解明)
- 性成熟年齢: 雌3~4歳、雄4~6歳
- 繁殖期・繁殖場: 晩春から夏、オホーツク海(成熟雌は1~2年毎に出産)
- 索餌期・索餌場: 周年、北海道沿岸、オホーツク海、三陸沖
- 食性: ハダカイワシ類、スケトウダラ
- 捕食者: シャチ

漁業の特徴

北海道、青森県、岩手県および宮城県で知事許可の突きん棒漁業で捕獲されている。この漁業は現在、いるか類の漁獲頭数では我が国最大である。捕獲は岩手県船が卓越している。操業は5~6月と9~10月に北海道周囲で、11~4月に三陸沖で行われる。リクゼンイルカ型は1系群である。イシイルカ型の大多数は日本海-オホーツク海系群である。大型捕鯨業のモラトリアムによって本漁業には好況期もあったが(平成6年度、600円/kg)、現在は浜値が低迷中(300円未満)である。



北太平洋のイシイルカの分布(吉岡・粕谷 1991を改変)



イシイルカ型



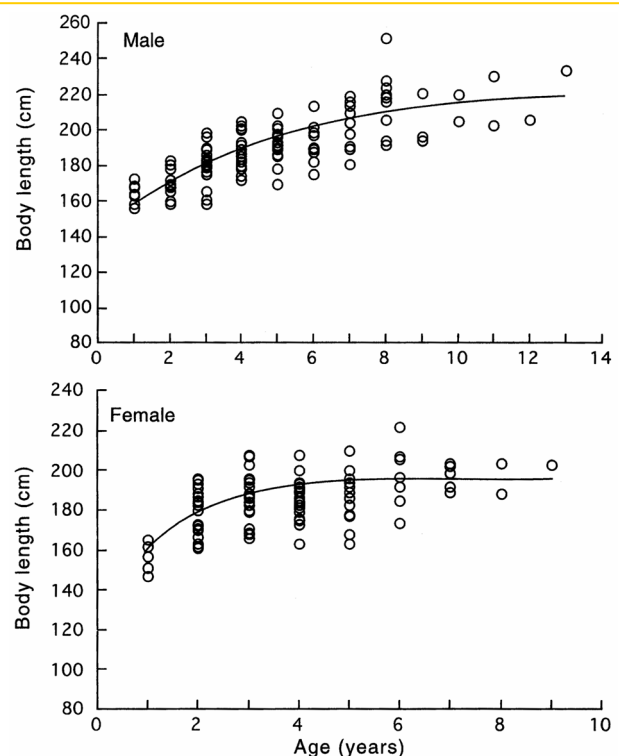
リクゼンイルカ型

利用・用途

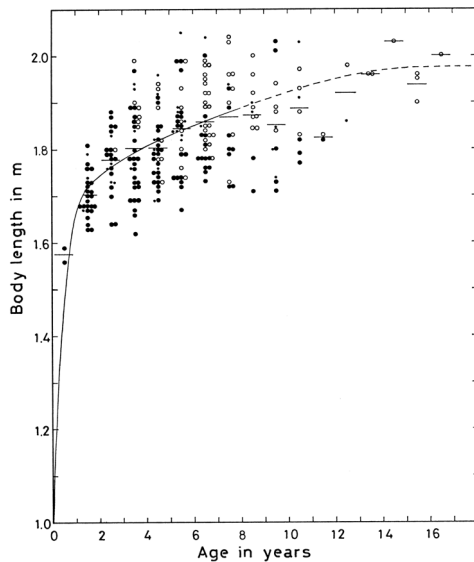
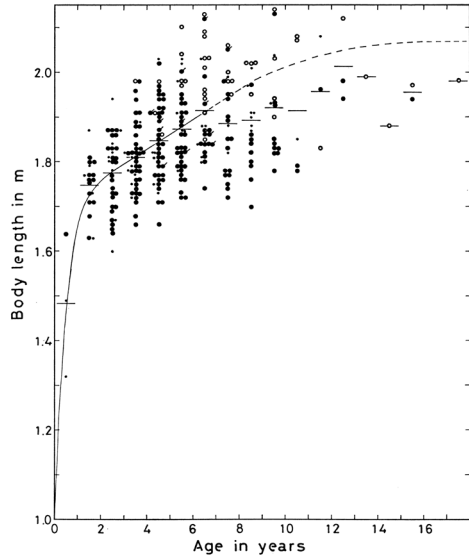
刺身、煮物など

漁獲の動向

1987年以前は年間2万頭以下の捕獲であったが、モラトリアム以降は鯨肉の流通不足を補うためか、1988年に捕獲頭数が4万頭以上へと急増した(この年までは、2つの型が統計上区別されていない)。その後は捕獲枠導入によって両型合計15,000頭程度の水準にある。特に近年は需要がひげ鯨に戻りつつあるため、魚価維持のために業界は漁獲を調整しているように見受けられる。



イシイルカ型イシイルカの成長曲線(上;雄、下;雌)
(仲松 2000)



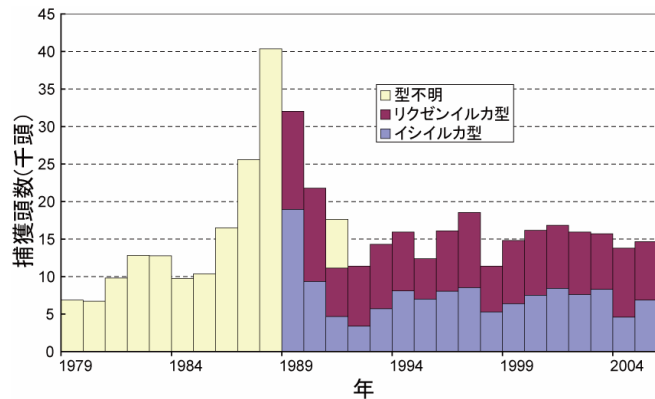
リクゼンイルカ型の成長曲線
(上:雄、下:雌)(Kasuya 1978)

資源管理方策まとめ

- 操業海域の道県知事による許可制
- 体色型別の捕獲枠の設定
- 漁期の設定
- 捕獲統計の集計

資源評価まとめ

- 目視調査に基づく資源量推定値
- 管理目標は現在の資源水準の維持
- PBR の適用(可能性)



イシイルカの型別の捕獲頭数の推移(1979~2005年)
(水産庁遠洋課集計)

管理方策

鯨類の再生産率は 1~4%と経験的に考えられている。出産間隔から本種の再生産率が高い方(3~4%)であることが窺える。これに捕獲実績等も加味して1993年に捕獲枠が設定された。資源管理モデルの構築を求められているが、PBR(Potential Biological Removal; Wade 1998)の概念を適用することも可能と考えられる。PBRは、不確実性を取り込んだ捕獲枠決定方式であり、算出が容易であり、また捕獲枠の根拠の説明も容易である。

資源状態

イシイルカ型は1980年頃から開発された資源と考えられるが、リクゼンイルカ型の漁獲は戦前からの長い歴史がある。両型とも、危急の状態とは判断されておらず、現在、各種調査データを検討中である。両型の資源水準は、規制・操業形態等の変化により、見定めることが非常に困難で、現在調査中である。資源動向は過去5年間の捕獲がほぼ安定していることから横ばいと考えられる。

イシイルカの資源の現況 (要約表)

資源水準	調査中
資源動向	横ばい
世界の漁獲量	-
我が国の漁獲量 (最近5年)	1.4~1.7万頭 平均:1.5万頭